釣道楽

上の巻

村井弦斎著　村井米子編

八坂書房

釣道楽

上の巻

村井弦斎著
村井米子編

新人物往来社

釣道楽　上の巻

昭和五十二年十月三十日　第一刷発行

著　者＝村井弦斎
編　者＝村井米子

発行者＝菅　英志
発行所＝株式会社　新人物往来社
東京都千代田区丸の内三―三―一新東京ビル〒一〇〇
電話東京二一二―三九三一（代表）振替東京六―一五一六四三
印刷＝明邦印刷
製本＝大観社
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

釣道楽 上の巻▨目次

上の巻

一 尺余の鯉 一〇
二 御所望 一三
三 釣り落とし 一三
四 大獲物 一五
五 御来客 一七
六 祝い酒 一九
七 唯一の戒め 二〇
八 心の動揺 二三
九 心待ち 二四
一〇 兄弟分 二六
一一 写真帖 二八
一二 同胞の情 二九
一三 鮒釣り 三一
一四 鯉ヵ淵 三三
一五 三十六鱗 三五
一六 学校通い 三六
一七 親しき友 三八
一八 突飛説 四〇
一九 一足飛び 四二
二〇 実の親 四四
二一 一珍事 四六
二二 難問題 四七
二三 実母の心 四九
二四 養家の情 五一
二五 胸中の憂い 五三
二六 神信心 五五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二七 掛け合い 五六
二八 一新案 五八
二九 感激 六〇
三〇 空頼み 六二
三一 海釣り 六三
三二 神経作用 六五
三三 親と子 六七
三四 入れ知恵 六八
三五 決心 七〇
三六 羅呉服 七二
三七 帰宅 七四
三八 家出 七六
三九 引き留め 七七
四〇 別離 七九
四一 心の同胞 八一
四二 螢一点 八二
四三 さようなら 八四
四四 心の疲れ 八六
四五 夜逃げ 八八
四六 引っ越し 九〇
四七 支度 九二
四八 合い宿 九四
四九 道連れ 九五
五〇 人の迂濶 九七
五一 犬と猿 九九
五二 お友達 一〇一
五三 厄介者 一〇三
五四 真面目 一〇五
五五 低気圧 一〇七
五六 朝の台所 一〇八

五七 愛想 二〇
五八 釣り商売 二二
五九 釣り道具 二四
六〇 手始め 二六
六一 周旋口 二七
六二 意見 二九
六三 招待 三一
六四 顧客 三三
六五 危険 三五
六六 爪弾き 三七
六七 分配 三八
六八 田舎者 三一
六九 ご馳走 三三
七〇 御姓名 三四
七一 人の邪魔 三六
七二 祟り目 三八
七三 漂流人 四〇
七四 女の一念 四二
七五 浪子の姿 四三
七六 立ち戻り 四五
七七 旅籠屋 四七
七八 小間物屋 四九
七九 聞き流し 五〇
八〇 眼と鼻 五二
八一 旅立ち 五四
八二 邂逅 五五
八三 子供気 五七
八四 心遣り 五九
八五 心の友 六〇
八六 合う心 六二

八七 新希望　一六四
八八 海底動物　一六六
八九 鯛釣り　一六八
九〇 章魚一尾　一六九
九一 久里浜見物　一七一
九二 あの舟　一七三
九三 鯵釣り　一七五
九四 海老の眼　一七七
九五 単細胞　一七九
九六 招き入れ　一八一
九七 もてなし　一八三
九八 深き関係　一八四
九九 貝拾い　一八六
一〇〇 花のつぼみ　一八八
一〇一 生きた人形　一九〇
一〇二 磯魚　一九二
一〇三 清き水　一九三
一〇四 手伝い　一九五
一〇五 行く末　一九七
一〇六 わが精神　一九九
一〇七 松虫　二〇一
一〇八 心の奥　二〇二
一〇九 最愛の情　二〇四
一一〇 道理力　二〇六

「釣道楽」の生まれるまで　村井米子

釣道楽 上の巻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

上の巻

一　尺余の鯉

蘆花の深沢しずかに綸を垂る、月夕烟朝幾十春、と古人の詞ではないけれども一竿の風月を伴として安倍川の河岸に釣りを垂れる閑人がいる。年の頃は五十前後、俗界の紛擾をさけてかかる清遊にふける程であるから相貌風采賤しからず、釣竿は東京仕立ての五本継ぎ、筌も道具もそれに応じて立派だが、道具の割合に獲物はあがらず。「ああ、どうも釣れんな、きょうは朝から引きもせん。魚がいないのか知らん、それとも餌を食わんのか。なんとか少し竿の先でも動かせばいい。おや、動いた。いまのブルブルは変だぞ、なんだ風が出たのだ、また悪い風になった。東風が吹き出してはいよいよ仕方がない。どうです池水さん、そちらの方は少し当たりますか」と、人のけはいのない草むらに向かって声をかける。

今までは音もなかった草むらから、饅頭笠をあげて顔を出した同年輩ごろの釣客が「いや川沼さん、こっちも御同様、何にも当たりません。きょうは全く陽気がわるいのです。どれ、そちらへ参って一服やりましょうか」と、蜘蛛の巣をはらい草むらを押しわけてガサガサと出てきた。川沼と呼ばれた男は立派な手提鞄の中から東京製の西洋菓子を取り出し、「さあ一つ召し上がれ」。池水「いや、毎度馳走で済みません、釣りもこんなに閑では少し張合いが抜けます。またきょうもあぶれですかな」。川沼「私はもう五日程あぶれました」。池水「それはご辛抱で、鯉釣りはあぶれが多いからよほど気を長くせんければ釣れません。そのくせ魚がいないのではない。さっきからもじり(癸)もたくさん見えるから、この淵に鯉はたくさん寄っているのです。そら、向こうで跳ねました。おや、あちらでも跳ねています、気になるではありませんか」と、共に菓子を喫しながら水の面を眺めるとき、釣竿の側三尺も離れていない処にサッと水音がし、全身を抜きだして躍り上がった二尺余の鯉。二人は呆気にと

られて顔を見合わせただけ。そのうちに鯉は沈んで、あとは水に波紋をのこし、沈々寂寞、竿も動かず魚の影も見えない。池水老人が笑い出し、「あはは、人を馬鹿にしている、どうしてもあの鯉を釣り上げてしまわなくっては……」とか、まだ一本の紙巻煙草も吸い尽くさないのに再び草むらの中へ入り込もうとするのを、川沼老人が暫くと引き止め、「まあ、ゆるゆると致しましょう。気をあせっても釣れないときは無駄です。なに、釣りというものは、魚を釣るばかりが楽しみでありません。すなわちこのうちの興味を楽しむのですから釣れないでもやめられません。まだ日は高いし、ゆるゆる休んで夕黄昏を釣りましょう。ときに池水さん、きょうは鱗次郎さんをお連れになりませんでしたな」。池水「はい、きょうは学校の試験がまだ残っているそうですから連れてまいりません。あれがおりますと必ず一、二本は釣れます。あれは私よりよほど釣りが上手で、もっとも妙な性質で、物の根底まで研究しなければ承知しないという癖があって、魚を釣れば家へ帰ってその魚を解剖し、鯉の胃中に何の食物が多いから鯉は脂肪性を好むだろうとか、鮒を釣るにもみみずを培養して手製の餌を作りだすくらい。そのせいか、あれを連れて来ますと、きっと釣れます」。川沼「天性釣りに適したお子さんですな、おいくつです」。池水「十七になります」。川沼「たいそう学問もよくお出来で、学校では試験毎に必ず第一等の優等生におなりなさるそうですね」。池水「いや、それは僥倖でございましょうが、しかし天性動物のことが好きですから、行く行くは動物学者にしてやりたいと思います。ことに水産動物を専門に研究させたら、わが国は水産国であり、社会に利益を与えることもあろうと存じますけれども、お愧しいことに私が微力で、充分の学資を給することができません」と、多数の親にこうした歎きがある。

川沼老人は突然に「失礼ですが、鱗次郎さんは御次男ですから他所へ御養子におやりなさることはできませんか」と、話のついでらしく尋ねた。

二　御所望

その言葉は話のついでなれどもその本心はどうしてどうしてついでではなく、池水老人が「はい、養子にやらぬこともありません」と答えたとき、川沼老人は俄かに熱心な様子となり、「もし池水さん、私はあなたに御懇望があります。それはほかでもありません、ご無理に願ってもぜひどうか鱗次郎さんを私どもの養子に戴きたいので、もはや疾くよりその心で何か好い折があったら申し出そうと予て思いましたけれども、あなたとはこの釣場でのお馴染であまりぶしつけであるし、こんな所で申し上げるのもなお失礼ですが、ちょうどお話の出たのを幸い、強いてお願い申すのです。じつは先頃、ここで初めて鱗次郎さんにお目にかかったとき、ああ好いお子さんだ、どうかこういうお子さんを養子に欲しいと思って家へ帰ってそれとなくお噂をしてみると、娘の浪子が同じ学校でよく御様子を存じているのです。校中第一の優等生で教師も末頼もしく思うということを聞きましたから、いよいよご所望が致したく、それについてあなたに毎度お目にかかりたいために鯉が釣れんでもわざわざここへやって参るくらいです。はなはだご無理のお願いに違いありません。あなたの御愛子を強いて御懇望いたすのはまことに失礼ですけれども、このことばかりはぜひどうか、お聞き済みを願いたい。たといご無理でもご承知を願いたい」と、容を改めて熱心に言い出した。

池水老人は意外の様子であったが、べつに不服らしい色もなく、「あれはどうせ他へ養子にやるとか、別家をさせるとかしなければなりませんから、県下第一の名家であるあなたのお家へ御所望に預かれば当人の幸福このうえもありません。しかし、あんな世間見ずですし、もしや後でご後悔のことがあっては……」。川沼「いや、決して決して。私は実子があってもとてもあんな良い子を生むことができんと思います。このようにまでご懇望いたすからは私の心中を御信用願いたいもので」。池水

「あなたのご心中は有難く思いますが、奥様やお嬢さんが何と思召しますか」。川沼「家内は承知のうえです。娘も無論大喜びに違いありません。鱗次郎さんのことは娘がいちばんくわしく存じていたのですから。しかし娘もまだ十五歳、鱗次郎さんも十七であるから、すぐ婚礼というのも早過ぎますし、当分は鱗次郎さんと娘を兄弟として育てまして、年頃になったときよく当人たちの心をきいて、そのうえで婚礼をさせます。そのとき娘が不服を申せば、他の嫁を迎えて娘を他へやります。もしや鱗次郎さんが娘を気にいらんとおっしゃれば、やはり娘を他へ縁付けても川沼家は鱗次郎さんに譲ります。私はこれ程の覚悟ですから、どうぞお聞き済みくださるよう」と、ひたすらに頼む。

池水老人は快く承い「不束な倅をそれ程にご所望下さるのは願ってもできないことで、じつに当人の幸いです。先刻もお話し申した通り、学資が充分あって勉強させたなら、少しは立派な人間になれる性質と見込んでいますけれども、私の微力があれの不幸、どうか好い所へ養子にやって立派な人間に仕立てて戴きたいと内々そう思わんこともありませんが、あなたのご所望に預かるのはこっちから願っても及ばぬこと、さっそく妻や当人に話しまして差し上げることに致しましょう」。川沼老人「それでようやく安心致しました。もしやお聞き済みがなかったらばどうしようと、いままでの心配はひと通りでありません。あなたさえご承知下さればさっそく明日にもお引き取り申したいもので、しかし、後になって奥さんが御不承知だとか御当人が御不服だとかいう御断わりはありますまいな、御不服でも御不承知でも強いて御承知あるように願います」。池水「家内や当人には私からよく申し渡して決して異存は申させません」と、親の権利は昔気質ともいうのであろうか。

三　釣り落とし

岸の上でこのような話に余念のない折柄、水中の魚はこの隙にこそ餌を窃もうと思ったのか竿の先

をぐっと水中に引き込んだ。それを早くも認めた池水老人が「そら、引きました川沼さん」と声をかけると、川沼はあわてて竿に手をかけ、「しめた、大物、大物。おお重い、竿が引き立ちません。おっとおっと、伸すこと伸すこと、糸を切られそうだ。竿が折れはしないか、なんでも三尺以上の鯉です。池水さん、早くその手網をとって魚を揚げてください。おお烈しい、この荒れること、杭の間へ駆けこみそうだ、早く手網を」と、かなたへ走り、穂先の水につかんばかり彎曲した竿を持って鞄を蹴飛ばし道具を踏みつけ、その騒ぎは狂気じみている。池水も共にうろたえ、「手網はありますが短くて届きません」。川沼「短ければ継ぎ柄があります」。池水「どこに」。川沼「どこですか、探してください。早くせんと堪えられませんよ。おっと、また杭へからむ、シッシッ」と追えども叱れども、釣られた魚とて一生懸命。水を離れてしまえば命を失うから力のかぎり狂いまわる。魚も狂えば人も狂う。川沼老人は頭から汗を流しての働き。池水は、他人の道具なので様子がわからず、「やっと柄がありました。この竿袋の中にありました。袋の中へ置いてはこういう時の間に合いません。これは御不念ですな」。川沼「不念でも何でも早く掬ってください」。池水「ところが柄に挿さらんのです。この手網は具合がわるい」。川沼「それは挿し込みでありません、捻じ込みです。エイそうひねってはあべこべで、内へ内へ」と気をいらだてる。

池水老人はようやく手網をとって魚を掬おうとすると、魚が大きいため容易に手網へはいらず、そのうえ手網を見ればいっそうの勢いで水底へ逃げこむ。川沼老人は、ひとりうろうろして「池水さん、そう手網を突き出して魚に見せてはいけません。ひっこめて隠しておき、魚が前へきたときさっと掬うのです」。池水「私は手網を使うことがごく下手で、いつも鱗次郎に取って貰いますが、あれは上手です。こういうときにあれがいますとな」。川沼「その鱗さんはこっちの人になったけれども今の間に合わん。そら来ました、早く、いま、えい、手網を魚にぶつけてはいけません。あ、しまっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com